

第二幕

登場人物…

マーニ

月の娘

牝牛

ディッシュユ

スプーン

ヴァイオリンの音が聞こえる。

BGMをヴァイオリンの独奏にしても良し。

月の馬車が夜空を駆けている。

ヴァイオリンに合わせて歌うように、ハミング。

マーニ 「♪H^he^hy, D^hi^hd^hd^hl^he D^hi^hd^hd^hl^he

月の娘 「♪H^ha^hi, D^hi^hd^hd^hl^he D^hi^hd^hd^hl^he

マーニ 「おっと、危ない」

馬車が急に飛び出してきた牝牛を避ける。

牝牛は馬車を飛び越して走り去っていく。

マーニ 「すみません、お怪我はありませんか」

月の娘 「私は平気よ、吃驚して少し欠けてしまったけれど。

それより、貴方の方こそ大丈夫？」

マーニ 「何て事ありません」

馬車から乗り出して牝牛の後ろ姿に叫ぶ。

マーニ 「おいこら、そこ行く牝牛や、牝牛。

月を飛び越すのは良いが、

も少し気をつけてくれまいか」

牝牛が立ち止まって振り返る。

牝牛 「これは失礼、月の御者マーニ。

けれどもこの季節ときたら、そもそもお空が大渋滞。

♪猫はフィドルを弾き鳴らし、」

月の娘

「♪牝牛は月を飛び越して？」

牝牛

「♪それ見て小犬は大笑い」

牝牛と月の娘は互いに顔を見合わせながら悪戯っぽく、それに続けて何処からか声がする。

ディッシユ

「♪そうして私とスプーンは」

スプーン

「♪逃げ出し、駆け出し、駆け落ちさ」

沢山の荷物の中から立ち上がるディッシユとスプーン。手をしっかりと繋ぎ合っている。

ディッシユは少し疲れ気味、軽く肩で息をしている。道が塞がってしまったため、追いついた馬車も停止。

マーニ

「やれ、道を空けてくれ。」

渋滞だろうが、こちとら走り続けにやならない。

賑やかなのはご免だよ」

スプーン

「これはすまない、月の御者マーニ。」

だけど彼女を見てよほら、息も絶え絶え」

ディッシユ

「走り詰めなの、ごめんなさいね」

スプーン

「少し休ませてあげとくれ。」

僕らの荷物をどけるのを

手伝ってくれるわけじゃなきゃね」

渋々と溜息を吐くマーニ。

月の娘

「まあまあ、マーニ。」

私達の馬にも休憩があっても良いんじゃないやなくて？
ここは高い夜空の天辺。^{てっぺん}

ハテイが来てもすぐに分かるわ」

牝牛

「お二人はところで何処からおいで？」

スプーン

「立派なネズの木が見える台所からさ」

ディッシユ

「遠く、遠くへ行かなきゃならないの」

スプーン

「おかみさんに連れ戻されるその前に」

月の娘と牝牛が顔を見合わせる。

月の娘

「いったい何があったというの？」

スプーン 「話せば長くもならないけれど。

僕らのおかみさんはとつても酷いお人だもんで。

彼女も僕も、汚れ放題、錆び放題。

なのにくに洗ってくれもせず。

おまけにぞんざい、がさつのオンパレード!」

ぽつり、息を整えたドイツシュが憂鬱そうに呟く。

ドイツシュ 「…あの人にこき使われるのはもう沢山」

慰めるようにドイツシュに寄り添い、

優しく頬に手を当てるスプーン。

ドイツシュは泥まみれで深く消沈しており、

スプーンも汚れているが恋人のために努めて元気を装う。

スプーン 「可哀想なドイツシュ。

体中ソースまみれで碌ろくに洗ってももらえずに」

ドイツシュ 「自慢の肌も醜みにくい muddy。

お鼻も欠けて獅子ししつ鼻ばな」

スプーン 「大丈夫、きつとまた元通りになるさ。

麗はくせきしの、誰もが振り向く白哲の君に。

欠けたお鼻もほら、ちゃんと僕が持ってきた。

後で粘土をこねて引っ付けよう」

ドイツシュ 「でももしも、汚れが体の芯まで染み付いたら？

貴方は私を嫌いになるわ」

スプーン 「なるわけないさ、可愛いドイツシュ」

ドイツシュ 「そんなの嘘よ」

スプーン 「そんなわけないさ、愛しいドイツシュ。

僕が折れてひしゃげて尺取虫みたくなつたとしても、

君は僕を変わず愛してくれるだろう？

だから、僕も同じさ」

二人の世界、置いてけぼりのギャラリィ。

マーニ 「(小さく咳払い)」

ドイツシュ 「嗚呼、勿論よ。」

ごめんなさいね、マイ・ディア・スプーン！

貴方の心を疑うつもりなんてなかったの」

スプーン 「知っているとも、マイ・ディア・ドイツシュ。

君はちよつと」

マーニ 「（咳払い）」

スプーン 「疲れているだけなんだ、無理もない」

君はちよつと〜疲れては一つの台詞。

台詞の最中に咳払いが入るイメージで。

マーニ 「（大きく咳払い）」

月の娘 「（あわせて小さく咳払い）」

マーニは露骨に話の脱線と惚気のろけを咎めている。

その露骨さを少し嗜たしなめつつ、マーニ同様に

話を元に戻すべく月の娘の咳払いが入る。

スプーン 「おっと、ごめんよ。話が逸れてしまったね。

まあ、そんな仕打ちに堪えられなくて。

僕らは二人で逃げてきたのさ」

牝牛 「それはまあ、お気の毒」

スプーン 「旦那様の気がしれないよ。

前のおかみさんはとっても器量の良い人で、

僕らも毎日つるつる、ぴかぴか、

綺麗に磨いてもらえたものさ」

ドイツシュ 「だけど前のおかみさんは、

くしゃみをしてころりと死んじゃった」

スプーン 「恐ろしいバラの花輪の呪いだよ」

ドイツシュ 「♪ Ring-a-Ring-o', Roses」

呪文のようにおかしに厳かに吟く。

『Ring-a-Ring-o', Roses』という遊戯歌より。

ペストの流行を暗喩した、実は怖い歌。

その響きにつられるように口々に繰り返す。

月の娘 「♪ Ring-a-Ring-o', Roses」

牝牛

「♪ Ring-a-Ring-O, Roses」

マーニ

「駄目です、駄目です、いけません」

月の娘がはつとして首を振る。

月の娘

「恐ろしい呪文、いけないわ」

しんみりとした空気の中でドイツシュが切り出す。

ドイツシュ

「この駆け落ちに心残りがあるとしたら」

たっぷり間をとって。

スプーン

「前のおかみさんの、忘れ形見」

ドイツシュ

「ロビンの坊やがいじめられていないかだけが、

私とっても……気になるわ」

ヴァイオリンの音に紛れてハティの遠吠え。

何となく不吉な感じに尾を引く。

遠吠えが聞こえてくると入れ代わりに

BGMがフェードアウトし最後は一瞬静寂の間を残す。

解説…

全て『Hey, Diddle Diddle』という

有名なナンセンス歌から出典。

猫がフィドルⅡヴァイオリンを弾き、

牝牛が月を飛び越え、それを見た仔犬が大笑いし、

皿と匙が駆け落ちするという、一見意味のない歌。

猫は獅子座、フィドルは琴座、牛は牡牛座、

仔犬は小犬座、スプーンは北斗七星、皿はコップ座を

それぞれ暗示しているという説がある。

なお、これらが夜空に一堂に会するのは四月のみ。